

序

外傷診療の特徴は何か、と問われると、1つには診療科にかかわらない総合的なアプローチの必要性ということがあがります。患者の年齢、性別、臓器、日時にかかわらず軽症から重症まで多部位にわたる外傷に対峙するのは、救急で患者を総合的に診ることの醍醐味です。重傷外傷ではその対応にスピードが求められ、多数の医師、看護師、技士などがかわり、チームで救命に向けて処置を行う一体感があります。軽症外傷では今後悪化する可能性を早期に発見し、重症化の予防や機能維持につなげたり、一見軽症に見えるなかから他部位の隠れた重篤な損傷を見つけ出したり、という達成感があります。主に外科系の診療科が得意とする分野ではありますが、昨今の超高齢社会においては、外傷患者には基礎疾患がセットになってついできますので、いわゆる内科系の知識も必要です。医学的な知識だけでなく、事故にかかわる法律や保険、さらには時として虐待や差別などといった社会的背景までも考慮する必要があります。まさしく総合的（全人的）な診療が求められます。

本書は主に、外傷診療に興味はある、だけれどまだ自信がない、くらいの先生方を対象としています。各項目は、経験を積み、総合的な知識とバランス感覚をもった脂ののった方々にご執筆いただいています。

第1章ではJPTEC™やJATEC™、PTLSに準じた外傷初期診療の標準的なアプローチを示しています。それぞれコースを受講してから本書を読むとよりよくわかると思いますが、もちろん受講していない方にもわかりやすい内容になっています。標準だけにとどまらず、それぞれの執筆者が自身の経験や学習から拾いあげた $+\alpha$ の考え方や対処法を教えてください。

第2章では主に重症外傷診療時に必要なスキルについて示しています。まずは読んで、実際に経験して、それからまた読んで、身につけてください。

第3章では軽症外傷への対応をまとめています。軽症外傷は、いわゆる一次、二次救急病院での救急対応では頻度が高く、しかもちょっとしたコツを知っているだけで診療が楽しくなる領域です。

第4章では特殊な状況として4項目示しています。よくある問題から比較的まれな状況まで、特徴的なアプローチを知ってください。

第5章では経験豊富な執筆者に、読者に知っておいてほしい印象的な症例について披露してもらいました。当直中にちょっと先輩の話聞く感覚でお読みください。

第6章では外傷診療の総括として、レジデントの立場からのこれから外傷を学ぶ人へのアドバイスの項目を設け、最後に日本の外傷診療の黎明期から現在、そしてこれから見渡して、編者らの先達である箕輪良行先生にご執筆をいただきました。

いずれの項目も、ただの教科書では得られない執筆者の経験からにじみ出る味わい、臨場感を感じていただけたと思います。もちろんすべてを網羅することはできませんので、本書を読んで疑問に思った点や気になった点を契機に成書、教科書などによって補足してください。さらにwebやブログなどさまざまなメディアから、世界中のup to dateな情報を得ることができます。標準（スタンダード）と応用（バリエーション）、技（tips and tricks）をとり混ぜて、読者おのおのの外傷診療のモデルを構築してください。

皆様が少しでも自信をもって楽しく外傷診療にあたられることを願っております。

2016年8月

川崎市立多摩病院救急災害医療センター
田中 拓